

続・”Boys, be ambitious”考究

東京工業大学名誉教授

安部明廣

(平成 27 年 2 月 6 日記、3 月 14 日掲載)

前編(“Boys, be ambitious”考究 <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/bun69BoysBeAmbitious.pdf>)で、Clark 先生が札幌農学校の開校式の挨拶の中で用いた lofty ambition という表現に触れた。Lofty がつくと、尊い、高邁なという響きが加わり、単なる大志とか野心とは異なった印象を与える。若い学生達の胸に呼び覚まされた高邁な志の説明として、Clark 先生は続きの節で次のように述べている。

Let every one of you, young gentlemen, strive to prepare himself for the highest positions of labor and trust and consequent honor in your native land which greatly needs your most faithful and efficient service. (若い紳士諸君、君達の誠実で有能な働きを真に必要としている祖国において、努力と信頼に対する最高の地位と、それに伴う名誉とに値する人物となるよう、諸君一人一人が自ら精進することを望む。)

洋の東西を問わず、若い人達への期待は、単なる職業上の成功ではなく、それ相応の人物たることを求めることが多い。安岡正篤師が、自らが埼玉県菅谷の地に設立した日本農士学校の卒業式での告辞はよく知られている。昭和 11 (1936) 年 3 月 28 日、第 5 期卒業式に臨んで、「且つ功名の地は久しく処(とどま)ること難く、富貴の人は其の志を損し易し、諸君は一時の顕栄を欲することなく、常に万世の為に太平を開くべき真誠の事に当り、知られずして愠(いきどお)らず、無名にして有力なる人物たらんことを本懐とすべし。」と述べたとある。なお、ここで張横渠を出典とする「万世の為に太平を開く」の一節は、昭和 20(1945)年 8 月 15 日の太平洋戦争終結の詔勅にも取り入れられている。

太平洋戦争直後の混乱期、昭和 20~26 年 (1945-1951) にかけて東京大学総長を務め、国立大学の復興に尽力した南原繁先生は、日本のサンフランシスコ平和条約締結に際して全面講和を主張し、単独講和の吉田茂首相と対立したことでも知られる。首相の「曲学阿世の徒」発言の原因ともなった昭和 25 年 3 月 28 日の卒業式の式辞「世界の破局的危機と日本の使命」は、「武力を棄てた国民に、己を守るものは、精神的独立の外にはない。」と指摘した上で、「かさねて云う、それは 荆棘の道、むしろ煉獄であるであろう。されど諸君。真理に在って勇氣を持て。(中略)。それはあらゆる人間の義務である。さらば、諸君の前途の祝福されんことを祈る。」と結ばれている。

その後を継いだのが矢内原忠雄総長 (昭和 26~32 年) (1951-1957) である。昭和 28 年 4 月 11 日の「入学式の言葉」は、「社会に出て高貴なる目的のために自己の学問をささげようとする者は、人生において高貴なるものとは何であるかを、先ず知らねばならない。(中略)。諸君の若き日においてこれを見出すことは、専門的知識の断片を集積するにまさりて、遥かに重要である。私は諸君が、本学に学ぶ数年間を空費せざらんことを希うて止まないのである。」

大河内 一男東大総長が、昭和 39 年 (1964) 3 月 28 日の卒業式において「肥った豚の榮譽に安住するよりは、例え身はやせ細っても信念に生きることが人間らしいのであります。卒業生の諸君がやせたソクラテスになる決心をしたとき、日本はほんとうにいい国になるでしょう。」という訓示を予定原稿に書き込んでいたという話もまた衆知のことである。

Clark 先生は島松での別れに臨んで見送りの学生達に何気なく“諸君、元気で立派な人になれ!” くらいのつもりで”Boys, be ambitious”を口にされたのかも知れないが、その他の場面も参考にする と、”ambitious”に込めた思いばやはり”lofty ambition”ではなかったのだろうか。Ambitious を大志、大望と訳しても誤りではない。がしかし、それでは ambi が本来有する“漠とした”という広がり

ュアンスが直ちには読み取れない。Be famous ではないのである。望は「大望」でも「野望」でもあり得る。Ambitious が内包する二つの矛盾する概念を表わす単語は日本語には見当らない。大局を見通す努力があってこそその大志である。響きは少し劣るかもしれないが、“少年よ、志を高く”か、いっそのこと“少年よ、大局に立て”にすべきであったのかも知れない。

Clark 先生の残した言葉の邦訳について誤解のないようにと真意を説いた Roland 牧師、矢内原先生、島松での離別の絵画に Roland 牧師の言葉のエッセンスを書き入れた田中画伯の配慮に深く敬意を捧げたい。

参考文献

「東京大学歴代総長式辞告辞集」東京大学創立 120 周年記念刊行会編集 東京大学出版会(1997)